



ランチセッション

「見た・感じた・考えた 多民族国家ラオス～JICA エッセイコンテスト 2017 研修報告～」

●発表者：長澤パティ明寿（山形県立山形東高等学校 2 年）

●2017 年度の JICA 国際協力エッセイコンテストにて長澤パティ明寿さんが「審査員特別賞」を受賞しました。

長澤さんを含む高校生の受賞者 9 名は、副賞として夏休みの期間を利用し、ラオスの国際協力の現場を視察する海外研修に参加しました。その研修を通して感じたこと・考えたことを、ランチセッションにて報告しました。

<p>ラオスでの訪問場所</p>	<p><u>ビエンチャン</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ JICA ラオス事務所 ・ 在ラオス日本国大使館 ・ ラオス日本センター ・ ホームステイ ・ パトゥーサイ ・ タラートサオ ・ 托鉢体験 <p><u>ルアンパバーン</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 托鉢見学 ・ 青年同盟（青年海外協力隊英語教師隊員現場視察） ・ UXO（不発弾） Lao ビジターセンター ・ ワット・シェントン ・ 伝統芸術民族センター ・ プーシーの丘 ・ ナイトマーケット
<p>所感</p>	<p><u>研修を通して</u></p> <p>・私は多民族国家、ラオスという視点を持ち今回の研修に臨んだ。「私たちはラオスが 49 の民族全てによって形作られていると考えている。そのため、植民地時代に強制的に戦いをさせられた時以外に争いはなかった。国も平等に権利を与えてくれている。」ルアンパバーン伝統芸術民族センター職員・カム族出身の方の言葉だ。</p> <p>多文化共生のため世界で共有すべき大切な価値観がラオスにあると強く感じた。この言葉を胸に留め、世界で文化間対話を促進し、文化多様性を活かした持続的な世界平和創造に寄与できるよう、これからもアンテナを高く張って挑戦・活動し続けていきたい。</p> <p>・人々の間に流れるゆったりとした時間。豊かな自然とメコン川の雄大な流れ。笑顔でサバイディーと挨拶を返してくれる人々。忘れることができないカオニャオやラープの美味しさ。私は一週間の研修を通してラオスという国の大ファンになった。ぜひ皆さんにも一度ラオスを訪れて頂きたい。</p> <p><u>発表を通して</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラオスで学んだ・感じた・考えたことをまとめ、発表する過程で自分が現地で何を思ったのかを言語化して整理し、参加者の方からのご質問に答えることでさらに深めることが出来た。 ・今回、同世代の高校生に発表を聞いてもらうことが出来、大変嬉しかった。ラオスにて刺激的で充実した時間を過ごすことが出来たように、一編の作文を綴ることで広がる自分の視野、世界、可能性は無限であると感じた。国際協力、国際交流に対する素直な自分の考えを表現し、JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに応募することを中高生に強くお勧めする。 <p><u>今後</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後も、体感した貴重な経験を自分の中だけで留めずに様々な場で発信し、多くの人と共有することで多角的な視点から物事を掘り下げていきたいと思う。 ・結びに、ラオス研修について報告する貴重な場を頂けたこと、JICA 山形デスクの三澤さんはじめ関係者の方々に心より御礼申し上げます。コープチャイライライ。



ラオスでの研修の様子



JICA国際協力エッセイコンテスト2017 審査員特別賞 受賞作品

山形県立山形東高等学校1年 長澤パティ明寿「強い信念」

「協力隊として途上国に住み活動する。これは決して楽しい事だけでは無いが多くを学ぶことができる。」
「ただ技術を教えるのではなく一緒に創っていく事が大切なんだ。」この夏、父の母国であるネパールを訪問し、現役の青年海外協力隊員として活動されている方にお話を伺う機会があった。これはその際にお聞きした言葉だ。JICAが青年海外協力隊を派遣して今年で52年。一人一人の強い思い、信念、そして地道な努力の結晶が世界をどれだけ動かしてきただろうか。

私には目標がある。将来、世界で異文化理解教育を推進し、文化・教育という観点から世界平和に寄与する事だ。昨年から始まった国際社会の取り組みSDGs（持続可能な開発目標）で言えば、目標4-7にある「文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解などの教育」や目標16「平和と公正をすべての人に」に関わってくるだろう。なぜ私がこのような目標を抱いたのか。その1番大きな理由は、ネパール人の父と日本人の母を持った事であると思う。幼い頃から異文化にふれ、考える機会が多かった。もちろん、異文化にふれてびっくりする事や、あり得ない、信じられないと思う事も多々あった。例えばネパールの道路。なんと、大通りにも関わらず優雅に牛が寝そべっていたのだ。しかし誰も牛をどかさそうとはしない。むしろ、車や人が牛をよけていたのだ。私はこの光景にとても驚いた。父に訳を尋ねると、これはヒンドゥー教の考え方によるものだと知った。ヒンドゥー教徒にとって牛は昔から自分達の生活を支え、豊かにしてくれるものであり、信仰の対象であるそうだ。違いを学ぶ事で、多様な価値観を理解できる。異文化を学ぶ事、感じる事は私にとってとても興味深い事なのだ。

今の世界、文化が争いや対立の火種に利用されてしまっているように感じる。だが文化は本来、私がそうであったように、人々の心を引きつけ感銘を与えるものではないだろうか。もちろん、異文化を完全に理解し、認め合い、受け入れる事は難しい。しかし、他者の文化について深く知らないのに勝手なイメージだけで他者の事を決めつけてしまうのではなく、まずは他者の文化について深く知り、感じるべきだ。そうする事で他者の文化の価値観、真の姿が見えてくる。そしてこれが世界の多様性を理解し、自分の文化を改めて大切にしようとする事へとつながる。グローバル化がさらに加速していくこれからの国際社会において、世界の人々が共に生きるための大きなキーポイントになると考える。私はその事を、考え方の基礎がつけられる幼い頃からの教育を通して世界に広げていきたい。

私は今、その目標への第一歩としてJICA等の様々なイベントやセミナーに参加して、世界の文化にふれると共に、自分のホームタウンである山形についても学んでいる。そのような身近な1つ1つの体験、経験がこれから、私の活動の血となり肉となっていくだろう。身近な所にチャンスはたくさんある。そのチャンスを掴み、道を切り開いていきたい。

私がこれから進みたいと考えている国際協力の分野。おそらくこれは一筋縄ではいかない。しかしどんな時でも強い信念の基、現地の人々と共に活動していきたい。時に現実と自分の理想の狭間で迷い、悩み、壁にぶつかる事もたくさんあるだろう。でもそこが踏ん張りどころ。考え、会話し、現実を受け止めながらも理想にむかって走り続けていきたい。自分が世界を変える一人になるのだ。この強い気持ちを忘れずに。